

イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成

7世紀に成立したイスラーム教は西アジア・北アフリカに定着した。ヨーロッパのビザンツ帝国とフランク王国がこれに対抗し、つづいて西ヨーロッパで封建社会が成立した。

Q▶ イスラーム教の成立は、西アジア・ヨーロッパの人々や社会にどのような影響を与えたのだろうか。

アラブの大征服とイスラーム政権の成立

Q▶ アラブ＝ムスリム軍による大征服やイスラーム政権の成立を経て、西アジア・北アフリカの社会はどのように変わったのだろうか。

アラブ＝ムスリム軍による大征服

Q▶ アラブ＝ムスリム軍による大征服は、どのように進んだのだろうか。

6世紀の西アジアでは、ササン朝がホスロー1世のもとで国力を回復し、東地中海地域を支配するビザンツ帝国(東ローマ帝国)と勢力を競っていた。そうしたなか、砂漠の広がるアラビア半島で、点在するオアシスを中心に遊牧や農業、隊商交易に従事していたアラブ諸部族が、半島外に急速に拡大し、広大な領域の新たな支配者となった。そのきっかけとなったのが、7世紀前半にアラブ人の諸部族のあいだに広まったイスラーム教である。イスラーム教は、ユダヤ教やキリスト教の系譜のうえに生まれた宗教で①、メッカの名家クライシュ族に生まれたムハンマドによってとなえられた。

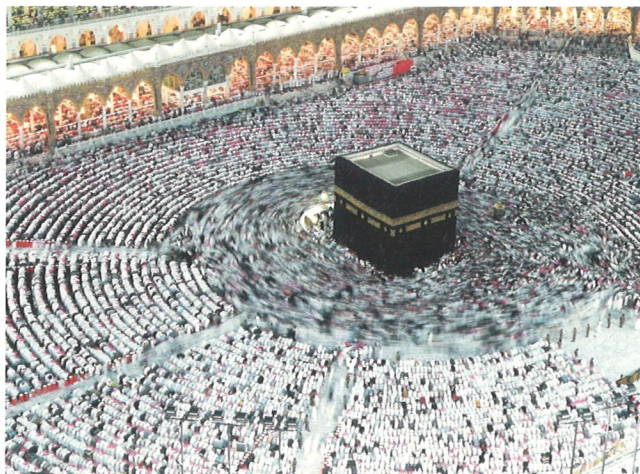
570頃～632



イスラーム教成立以前の西アジア

①ムハンマドは、『旧約聖書』(→p.26)と『新約聖書』(→p.83)をイスラーム教に先だつ啓示の書とみなしたため、ユダヤ教徒とキリスト教徒は「啓典の民」として信仰の自由を認められた。

メッカのカーバ聖殿 世界中のイスラーム教徒は、黒色の布でおおわれたカーバ聖殿に向かって礼拝する。写真は、メッカ巡礼に集まった信者たちがカーバ聖殿を時計と反対まわりに7回まわる行事をおこなっているところ。サウジアラビア。





偶像を破壊するムハンマド

イスラーム教成立以前のカーバ聖殿には多数の偶像がまつられていたが、それらはメッカを征服したムハンマド(顔を白布でおおった姿の中央上の人物)によって破壊された。

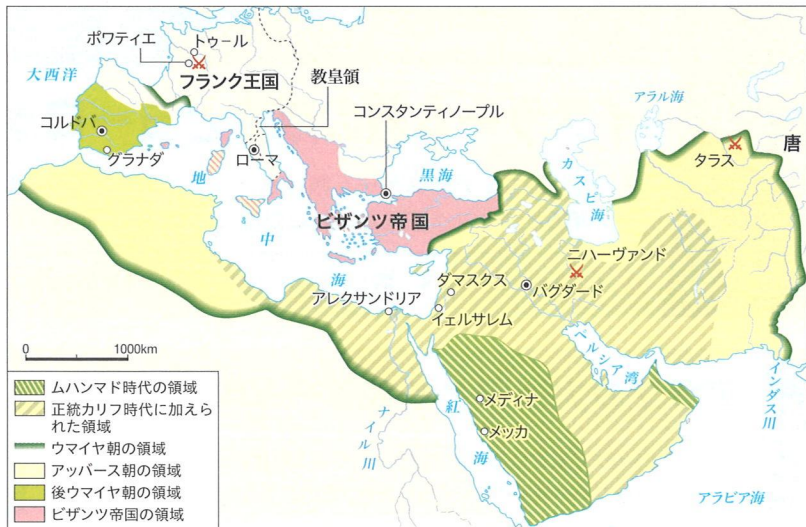
❶ この移住は**ヒジュラ**と呼ばれる。また、イスラーム暦(ヒジュラ暦)はこの年を起点とする。この暦は新月からつぎの新月までを1カ月とし(太陰暦)、1年は354日(閏年では355日)である。

❷ メッカには古くから多神教の神殿として**カーバ**があったが、ムハンマドはこれをイスラーム教の聖殿にあらためた。

❸ アブー=バクルからアリーに至る4人のカリフを、イスラーム教の多数派(スンナ派)は「正統カリフ」と呼ぶ。

この時代を**正統カリフ時代**とよぶ。

Q> この史料は、ムハンマドの後継者(カリフ)となったアブー=バクルが、その任についたときに語ったとされる言葉である。カリフは、ウンマのなかでどのような役割をもっていたのだろうか。



イスラーム政権の拡大

ムハンマドは、610年頃、みずからを唯一神**アッラー**の言葉を預けられた**預言者**であると考え、周囲の人々にアッラーへの絶対的帰依(イスラーム)を説いた。しかし、彼はメッカの有力者たちによる迫害にあい、622年にメディナへ移住した❶。ムハンマドは、メディナでイスラーム教徒(ムスリム)による大きな勢力をつくりあげ、630年にはメッカ❷を征服して支配権を固めると、その權威に多くのアラブ諸部族が従った。こうして、彼の率いるイスラーム教徒の共同体(**ウンマ**)は、有力な政治的・軍事的勢力となった。

ムハンマドの死後、アブー=バクル❸がその後継者(**カリフ**)に選出された。しかし、カリフの地位やウンマの統治をめぐってアラブ諸部族内に対立が生まれると、彼は人々の関心を対外戦争に向けるため、アラビア半島外への征服活動を開始した。その矛先は、すでにアラブ諸部族の移住が始まっていたイラク・シリア方面に向けられた。イスラーム教を

初代正統カリフ、アブー=バクルの選出

アブー=バクルが演説した。神を讃えるにふさわしい言葉で神を誉め讃えてから、言った。「諸君、私はあなたたちに指揮権を託された。あなたたちの中で最良のものでもないのに。だから、私がよいことをしたら協力し、悪いことをしたら正してほしい。誠実は信用を生み、虚偽は背信を生む。……私が神とその使徒(ムハンマド)に従っているかぎり、私に従え。私が神とその使徒に背いたなら、私に従う必要はない。さあ、立って礼拝をせよ。あなたたちに神の慈悲があるように。」(イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註、後藤明他訳『預言者ムハンマド伝3』)

642年のニハーヴァンドの戦いで

ササン朝軍に勝利

はたし
旗印とするアラブ＝ムスリム軍は、第2代カリフ・ウマルUmarの時代にササン朝を滅ぼしてイラク・イランを獲得し、またビザンツ帝国からシリア・エジプトを奪った。



ウマイヤ＝モスク 8世紀初め、ウマイヤ朝の首都ダマスカスに建設された、現存する最古のモスク。キリスト教の教会の一部を転用してつくられ、外壁やアーケードには、天国をイメージしたモザイクが描かれている。



ウマイヤ＝モスク

ウマイヤ朝の成立と拡大

Q ウマイヤ朝の時代に、イスラーム政権の支配はどこまで拡大したのだろうか。

その後、アラブ諸部族内でカリフ位をめぐって対立が深まり、その争いのなかで第4代カリフのアリーAliが暗殺された。アリーと対立してすでにカリフを名乗っていたシリア総督のムアウィヤMuawiyahは、ダマスカスを首都にウマイヤ朝を開き、それまでの慣習を破ってカリフ位の世襲を開始した。一方、アリーの血統を支持する人々はシーア派④と呼ばれ、ウマイヤ朝の支配に反対した。

ウマイヤ朝のもとで、アラブ＝ムスリム軍による征服活動は続いた。東では、中央アジアとインド西北部、西では北アフリカを征服し、さらにイベリア半島に進出して711年に西ゴート王国を滅ぼした。その後、フランク王国内にも進出したが、732年のトゥール・ポワティエ間の戦いで敗れ、その拡大はイベリア半島にとどまった。

ウマイヤ朝は広大な領域を支配するにあたり、被征服地の人々から、人頭税ジズヤと土地税ハラージュを徴収した。いずれも非イスラーム教徒に課せられる税であったが、実際には、被征服地の人々がイスラーム教に改宗しても免除されなかった。このようにウマイヤ朝の時代には、アラビア半島から移住したアラブ諸部族の優位が保たれていた。

④ シーアは「分派」を意味する。これに対して、ウマイヤ朝を支持した多数派は、預言者の言行スナナに従う人々とされ、のちにスンナ派と呼ばれるようになった。



バグダードの円城 バグダードは、ティグリス川西岸に建設された三重の城壁をもつ円形の都市である。円城内には、カリフとその一族の住居・官庁・軍隊の詰め所などがあり、商人や職人はその外側に居住区をつくって住んだ。

サーマッラーのモスク 写真は、イラク北部サーマッラーに現存する、アッバース朝のカリフによって9世紀半ばに建造されたモスクのミナレット。



アッバース朝の成立とその繁栄

Q▶ ウマイヤ朝はなぜ滅亡し、また、アッバース朝はどのような統治をおこなったのだろうか。

イラン人など異民族のあいだにイスラーム教を受け入れる新改宗者(マワリー)が増えると、彼らと特権的なアラブ人支配層とのあいだに軋轢が生まれた。こうした社会の対立に乗じて、ムハンマドの叔父の子孫であるアッバース家が750年に反旗をひるがえし、ウマイヤ朝を滅ぼしてアッバース朝を開いた。

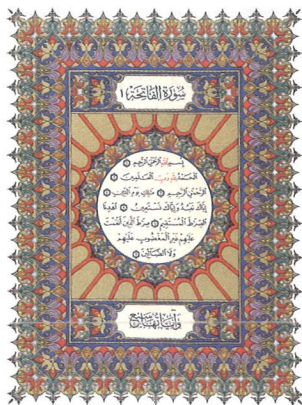
アッバース朝は、国家の中心をシリアからイラン・イラクに移して新都バグダードを造営した。アッバース朝のもとで、税はキリスト教徒やユダヤ教徒らが払う人頭税と、農地をもつ者が例外なく払う土地税などに整理され、民族の別をこえたイスラーム教徒のあいだの平等がはかられた。灌漑による農業生産力の向上や手工業の発達により、バグダードは繁栄を迎えた。さらに、アッバース朝によって広大な地域が統合されて交通路の安全が確保されたことから、イスラーム教徒の商人(ムスリム商人)らによるバグダードと各地を結ぶ交易も発展した。こうしてアッバース朝は、ハールーン・アッラシードの時代に最盛期を迎えた。

イスラーム文化の成立

Q▶ イスラーム文化はどのように成立し、また、どのような点に特徴があるのだろうか。

アッバース朝のもとでは、インド・イラン・ギリシアなどの文化的な伝統が融合し、多様な学問が興隆した。インドの数学がもたらされ、アラビア数字が生まれたのもその一例である。また9世紀初め以後、バグダードの「知恵の館」(バイト＝アルヒクマ)を中心に、ギリシア語による医学・天文学・幾何学・倫理学・哲学の文献が盛んにアラビア語に翻訳された。とくにアリストテレスの哲学はイスラーム神学の形成に重要な

→p.73



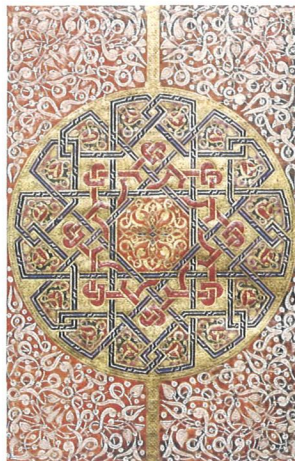
現代の『コーラン』『コーラン』の最初の一節「開扉の章」。ダマスカス、1985年刊行。

知恵の館で研究し、インド数学を導入して
アラビア数学を確立した。

役割を果たした。数学ではフワーリズミー、
医学では中央アジア出身のイブン・シーナ
一らが知られる。

Khwarizmi
780頃～850頃
Ibn Sina
980～1037

「医学典範」を著した。



アラベスク イスラム教では、
人物や鳥獣を装飾のモチーフにす
ることが忌避されたため、幾何学
的な文様や唐草文様、文字文様な
どの精緻な装飾文様が発達した。
こうした文様は、総じて「アラビ
ア風」の意味でアラベスクとも呼
ばれる。

その一方、イスラム教の信仰①に対す
る関心も高まり、聖典『コーラン(クルア
ーン)』やムハンマドの言行についての伝承
(ハディース)を扱う学問が発達した。ハデ
ィースの収集で知られるタバリーは、さら
に年代記『預言者たちと諸王の歴史』を編

纂した。こうした営みを通して、ムハンマドが示した生き方を理想とし、
それを基準に現実の問題に対応する法の体系がイスラム法(シャリー
ア)②としてまとめられ、イスラム法学者(ウラマー)たちが司法や政
治で活躍するようになった。

また、『コーラン』を学ぶためのアラビア言語語学が発達し、文学もア
ッバース朝の広大さを背景として多彩に発展した。インド・イラン・ア
ラビア・ギリシアなどに起源をもつ説話が集成され、それらはのちに
『千夜一夜物語』(『アラビアン＝ナイト』)にまとめられた。

美術・建築では、ビザンツ帝国の伝統を引き継ぐ職人・技術者がウマ
イヤ朝やアッバース朝のもとで活躍した。イスラム教は偶像を禁止し
ていたため、モスクなどで用いられる装飾では植物や文字を文様化した
アラベスクが発達した。また、中国から製紙法が伝わり③、その技術がア
ッバース朝期の文化を支えた。

このようにして、西アジアならびに周辺地域の文化とイスラム教、
そしてアラビア語が融合した新しい文化が生まれた。これをイスラム
文化という。その後、イスラム教が各地に伝播するにつれて、地域ご
との言語・文化的な特色が加わって、イラン＝イスラム文化、トルコ＝
イスラム文化、インド＝イスラム文化などが成立した。

① ムスリムの信仰と行為の内容
は、のち六信五行としてま
とめられた。六信とは、(1)神、
(2)天使、(3)各種の啓典、(4)預
言者たち、(5)来世、(6)神の予
定を信じることであり、五行
とは、(1)信仰告白、(2)礼拝、
(3)喜捨、(4)断食、(5)メッカ巡
礼を実践することである。

② イスラム法は、『コーラ
ン』やハディースを基礎にし
て、9世紀頃までに整えられ
た。その内容には礼拝・断
食・巡礼などをどのようにお
こなうべきかを示す「儀礼的
規範」と、婚姻・相続・刑罰
などに関係する「法的規範」の
ほか、租税や戦争の定義など
支配者がおこなう統治の基本
も含まれている。

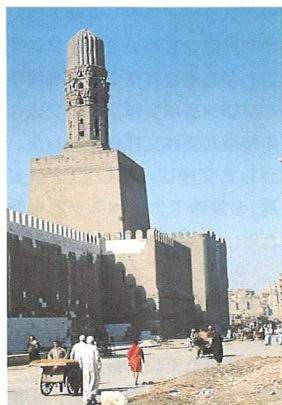
③ タラス河畔の戦い(→p.106)
で捕虜となった唐の職人から
伝わったとされる。やがてこ
の技術は、イベリア半島とシ
チリア島を経て13世紀頃にヨ
ーロッパへ伝えられた。

イスラム 政権の多極化

Q アラブ＝ムスリム軍の征服で生まれた1つの政権は、ど
のように各地の諸王朝に分裂していったのだろうか。

シリアのウマイヤ朝が滅亡すると、その一族がイベリア半島に逃れ、
コルドバを都に後ウマイヤ朝を開いた。後ウマイヤ朝は現地の習慣・制

756～1031



カイロの「勝利の門」 カイロ旧市街の北側にある凱旋門^{がいせんもん}。これに内接して、ファーティマ朝のカリフによって建設されたモスクがある。



コルドバのモスク 赤と白の二重馬蹄形^{ばていけい}アーチで知られる巨大モスクで、メスキータと呼ばれる。レコンキスタ(→p.131)後の13世紀にキリスト教の大聖堂に転用された。

度を取り入れて支配を安定させ、そのもとでイベリア半島にイスラーム教が広がった。アッバース朝と同じく学問の発達はここでもみられ、芸術の分野でもアラベスクなどを多用したすぐれた作品が生み出された。

こう
後ウマイヤ朝の成立により、アラブ＝ムスリム軍の征服でつくられたイスラーム政権の分裂が始まった。この動きは、エジプトのトゥールーン朝や中央アジアのサーマーン朝^{→p.106}など、アッバース朝の周辺地域に地方政権が自立することによって加速した。10世紀後半には、北アフリカにおこったシーア派のファティマ朝^{Fatima 909～1171}がエジプトを征服した。ファティマ朝の君主はカリフを名乗ったため、分裂は決定的なものとなった。

10世紀のアッバース朝では、トルコ系のマムルーク^{mamluk}(奴隷軍人)^{たいとう}の台頭^{→p.111}などによってカリフの権力が弱まっていたが、それに乗じてシーア派を奉じるイラン系の軍事政権ブワイフ朝^{Buwayh 932～1062}がバグダード^{にゅうじょう}に入城した。ブワイフ朝は、アッバース朝カリフを意のままにあやつり、946年に大アミール^{amir}①の称号を得て実質的な統治をおこなった。こうして各地に政権が並び立つことにより、アッバース朝の支配は名目的なものとなっていった。

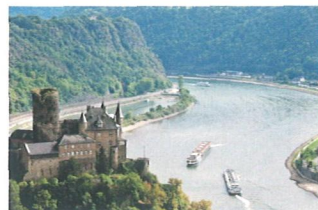
①軍司令官(アミール)たちの第一人者をさす。



ヨーロッパの地勢



現在のヨーロッパの大森林(ドイツ西南部のシュヴァルツヴァルト)



ライン川 スイスに源を発し、ドイツ西部を流れて北海に注ぐヨーロッパの大河の1つ。古くから交通や商業における大動脈の役割を果たし、しばしば政治上の国境線ともなった。

2 ヨーロッパ世界の形成

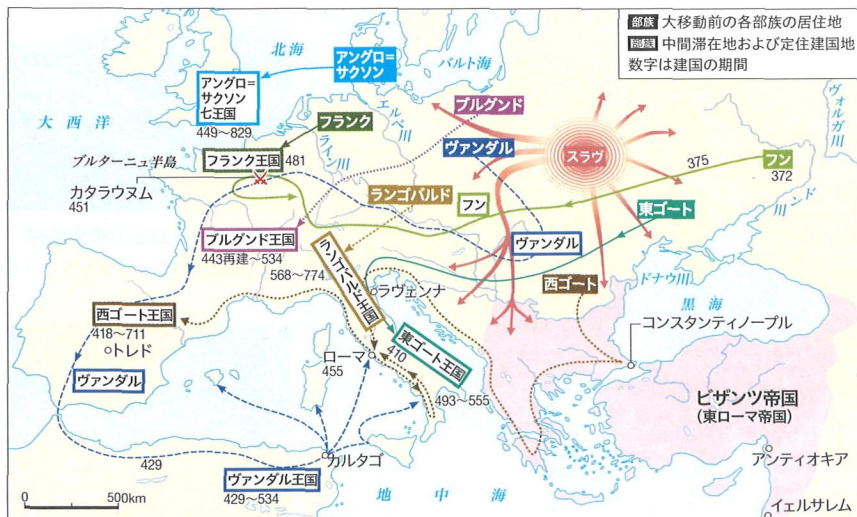
Q▶ 東西ヨーロッパは、どのようにして独自の世界を形づくっていったのだろうか。

ヨーロッパの風土と人々

Q▶ ヨーロッパの自然条件と人の移動には、どのような関係があるのだろうか。

ヨーロッパとはユーラシア大陸西端、ウラル山脈から大西洋までの範囲を指す。アルプス山脈以北の地域では平坦な丘陵地と平野が続き、また大河が多く、物資の輸送に重要な水路となっている。大西洋に面した地方は暖流の影響を受ける西岸海洋性気候で、冬にあたたく夏は涼しく、陽光は少ないが湿潤・温暖で、豊かな森林と肥沃な土壌が育ち、穀物栽培や牧畜に適している。しかし、ヨーロッパの東に行くほど乾燥して寒冷な大陸性気候になり、土地は遊牧に適していて、その果てはロシアの大森林地帯と中央ユーラシアの広大な草原地帯に連なる。一方、ヨーロッパの地中海沿岸は、山がちで大河がなく、夏が暑くて乾燥する地中海性気候に属する。

このようなヨーロッパの自然条件は、東から西へ、また北から南への大規模な人間の移動をたえず引きおこし、それによって多様な文化の混合がもたらされた。言語的にはインド＝ヨーロッパ語族の西方系言語を話す人々、すなわち南欧のギリシア人・イタリア(ローマ)人・スペイン



ゲルマン人の移動 ゲルマン人の移動はたんに武力による侵入ではなく、家族ぐるみの移動であった。

ゲルマン人とスラヴ人の移動

人、西欧のケルト人・ゲルマン人、東欧のスラヴ人などが活動したが、マジヤール人・フィン人・フン人など、ウラル語系・アルタイ語系の人々も重要な役割を果たした。またときにはイスラーム勢力が侵入するなど、外部の人々の影響によってヨーロッパ世界の形成がうながされたことも見のがせない。

ゲルマン人の移動とイスラーム勢力の侵入

Q なぜゲルマン人とイスラーム勢力は地中海世界に侵入したのだろうか。

① 紀元前後頃の原始ゲルマンの社会については、カエサルの『ガリア戦記』やタキトゥスの『ゲルマニア』が重要な史料である(→p.82)。

ヨーロッパには、前6世紀頃からケルト人が広く住み着いていた。バルト海沿岸を原住地とするゲルマン人は、ケルト人を西に圧迫しながら勢力を拡大し、紀元前後頃にはローマ帝国と境を接するようになった。

その頃のゲルマン人は数十の小部族にわかれていた。貴族・平民・奴隷の身分差がすでにあったが、重要な決定は成年男性自由人の全体集会である民会がおこなった①。農業がおもな生活の手段となり人口が増えると、耕地が不足しはじめた。そのためローマ帝政後期になると、ローマの下級官吏・傭兵・コロヌスとして、平和的に帝国内に移住する者も多くなった。同時にゲルマン人の小部族は、軍事的指導者である王のもとにまとまって大部族へと成長した。

4世紀後半、アジア系のフン人がドン川をこえて西に進み、ゲルマン人の一派である東ゴート人の大半を征服し、さらに西ゴート人を圧迫した。そこで西ゴート人は375年に南下を始め、翌年にはドナウ川を渡ってローマ帝国領内に移住した。それをきっかけにほかのゲルマン諸部族

も大規模な移動を開始し、約200年におよぶゲルマン人の大移動が始まった。**西ゴート人**はローマを略奪^{りやくだつ}したのち、ガリア西南部とイベリア半島に移動して建国した。また、**ヴァンダル人**は北アフリカに、**ブルグンド人**はガリア東南部に、**フランク人**はガリア北部においてそれぞれ建国した。**アングロ=サクソン人**は大ブリテン島に渡り、のち9世紀までのあいだにアングロ=サクソン七王国(ヘプターキー)を建てた。

一方、フン人は、5世紀前半に**アッティラ王**がパンノニア(現在のハンガリー)を中心に大帝国を建てた。しかし、**カタラウヌムの戦い**で西ローマ帝国とゲルマンの連合軍に敗れ、アッティラ王の死後に大帝国は崩壊した。この混乱のなかで、西ローマ帝国は476年にゲルマン人傭兵隊長**オドアケル**によって滅ぼされた。また、テオドリック大王率いる**東ゴート人**は、ビザンツ(東ローマ)皇帝の命令を受けて、イタリア半島に移動してオドアケルの王国を倒し、ここに建国した。568年北イタリアに**ランゴバルド王国**が建てられたのを最後に、民族大移動の波は一応の終息をみた。

他方、アラビア半島から急速に広がったイスラーム勢力は、ウマイヤ朝時代にイベリア半島に渡って西ゴート王国を滅ぼした(711年)。

ビザンツ帝国の成立

❶ 西ヨーロッパが混乱していた一方で、ビザンツ帝国はなぜ繁栄を続けたのだろうか。

西ローマ帝国が滅びた頃、東ヨーロッパでは**ビザンツ帝国**(東ローマ帝国)がギリシア正教^{ゆうごう}とギリシア古典文化を融合した独自の文化を築いていた。ビザンツ帝国はゲルマン人の大移動によっても深刻な打撃は受けず、その商業と貨幣経済は繁栄を続けた。首都**コンスタンティノール**

プル(旧名ビザンティウム)は、ヨーロッパ世界最大の貿易都市として中世を通じて繁栄した。政治面では、ローマ帝政末期以来の巨大な官僚制による皇帝専制支配が維持されていた。ビザンツ皇帝はコンスタンティノール教会を中心に、地上におけるキリストの代理人としてギリシア正教会を支配する立場にあり、政治と宗教両面における最高の権力者であった。



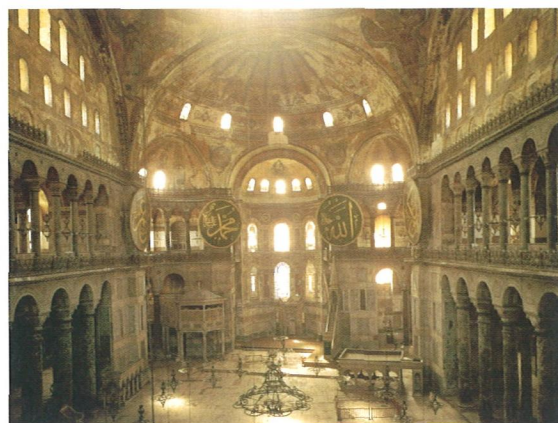
ソリドウス金貨(ノミスマ)
ビザンツ帝国では、コンスタンティヌス帝時代からつくられはじめたソリドウス金貨が、ノミスマと呼ばれて通用し続けた。

❷ ビザンツ皇帝と結びつき、コンスタンティノール教会を中心として東欧やロシアなどに広まったキリスト教。典礼にはギリシア語を用い、「正統」を主張したことから「正教」と呼ばれる。

❸ 一方、西ヨーロッパでは、のちに皇帝と教皇の2つの権力が並び立つようになった。



6世紀半ばのビザンツ帝国の領土



ハギア=ソフィア聖堂とその
内部 西アジア・ギリシア・
ローマの建築を融合したビザ
ンツ様式(→p.123)の代表。
聖堂の左右に立つ塔(礼拝へ
の呼びかけに用いられる塔)
は、のちオスマン帝国の占領
後にモスクとして使用するた
めにつけ加えられた。6世紀
建立。トルコ、イスタンブル。



ユスティニアヌス大帝(中央)
ローマ帝国の再建をめざして
西方に領土を広げた。サン=
ヴィターレ聖堂(→p.123)の
モザイクより。

西ローマ帝国の滅亡後しばらくは、西方のゲルマン諸国家も、ローマ
帝国の唯一の後継者としてビザンツ皇帝の權威を認め、服従した。**ユス**
ティニアヌス大帝は地中海帝国の復興をはかり、北アフリカのヴァンダ
ル王国やイタリアの東ゴート王国を滅ぼして一時的に地中海のほぼ全域
における支配を復活させた。内政においては『**ローマ法大全**』の編纂や、
ハギア=ソフィア聖堂の建立などの事業に力を注ぎ、また中国から養蚕
技術を取り入れ、絹織物産業発展の基礎を築いた。

フランク王国の発展

Q ▶ なぜフランク王国が西ヨーロッパ世界の中心的役割
を果たすようになったのだろうか。

ゲルマン諸国家の大半が短命だったのに対し、その後着実に領土を広
げ、最有力国として西ヨーロッパ世界の形成に大きな役割を果たしたの
は、フランク王国であった。

481年に**クロヴィス**がフランク王に即位して**メロヴィング朝**を開き、
その後全フランクを統一して、ガリア中部を支配下においた。当時ほ
かのゲルマン人の多くが異端であるアリウス派キリスト教を信仰して
いたのに対し、クロヴィスは正統派のアタナシウス派に改宗した。こ
れはフランク王国がローマ人貴族を支配層に取り込んで、西ヨーロッパ
の中心勢力になる一因となった。6世紀半ば、フランク王国はブルグン
ド王国などを滅ぼして全ガリアを統一したが、8世紀にはメロヴィング
朝の権力は衰え、王家の行政・財政の長官である宮宰(マヨル=ドムス)
が実権を掌握するようになった。

この頃、西ゴート王国を滅ぼしたイスラーム勢力が、さらにピレネー
山脈をこえてガリアに侵攻しようとした。メロヴィング朝の宮宰**カール=**
マルテルは、732年に**トゥール・ボワティエ間の戦い**でイスラーム軍を



クローヴィスの改宗 彼は王妃の影響を受けて改宗し、カトリック信徒の多かったガリア住民との結びつきを強めた。14世紀の年代記の挿し絵より。



トゥール・ボワティエ間の戦い フランク(左)とアラブ(右)の騎士同士の戦いであったが、アラブ側の内紛もあって、フランク側はアラブ軍を全ガリアから駆逐することができた。中央の王冠をかぶっている人物がカール＝マルテル。『フランス大年代記』の挿し絵。

撃退し、西方キリスト教世界を外勢から守った。その子^{Pippin}ピピンは、^{Carolingians}カロリング朝を開いた。^{751~987}

このようにして西ヨーロッパは、フランク王国を中心に、ビザンツ帝国やイスラーム勢力とは異なる独自の世界を形づくりはじめたのである。

ローマ＝カトリック教会の成長

Q なぜローマ教会はフランク王国と手を組んだのだろうか。

フランク王国と協同して西ヨーロッパ世界の形成に貢献したのが、ローマ＝カトリック教会①である。ローマ帝政末期、五本山のなかでローマ教会とコンスタンティノープル教会が最有力であったが、西ローマ帝国の滅亡後、ローマ教会はビザンツ皇帝が支配するコンスタンティノープル教会から分離する傾向をみせはじめた。6世紀末の教皇^{Gregorius I}グレゴリウス1世以来、ローマ教会はゲルマン人への布教を熱心におこなった。また、6世紀から広がる修道院運動は、学問・教育や農業技術の発展に貢献した。こうしてローマ教会は西ヨーロッパに勢力を拡大し、とくにペテロの後継者を自任したローマの司教は、教皇(法王)として権威を高めるようになった。

キリスト教徒は以前からキリスト・聖母・聖人の聖像を礼拝していた。これが偶像崇拝を禁じたキリスト教の初期の教理に反すると考えられたこと、また偶像をきびしく否定するイスラーム教からの批判にこたえる必要にせまられたことから、726年にビザンツ皇帝^{Leon III}レオン3世は聖像禁令を發布した②。ゲルマン人への布教に聖像を必要としたローマ教会は

①キリスト教の正統派(アタナシウス派)のことをカトリック(「普遍的」の意味)という。

②聖像禁止令をめぐることはその後も論争が続いたが、聖像崇拝は9世紀半ばに復活した。

これに反発し、東西の両教会は対立と分裂を強めることになった。これ以後ローマ教会は、ビザンツ皇帝に対抗できる強力な政治勢力を保護者として求めねばならなくなった。

ちょうどこの時、カール＝マルテルがイスラーム軍を破って西方キリスト教世界を守った。そこでローマ教皇はフランク王国に接近をはかり、カール＝マルテルの子ピピンがフランク王位を継承することを認めた。その返礼にピピンはイタリアのランゴバルド王国を攻め、奪ったラヴェンナ地方を教皇に寄進した(「ピピンの寄進」)。これが教皇領の始まりである。利害が合致したローマ教会とフランク王国は、さらに結びつきを強めていった。

カール大帝

Q カールの戴冠は、世界の歴史においてどのような意義をもつのだろうか。

① フランク王国では、伯のほかにも、上位の貴族には公などの称号が与えられた。こうした称号は中世ヨーロッパを通じて継承されたが、近代には名目的なものとなった。

Q この史料は、カール大帝の業績や晩年の様子を側近が書き記したものである。カールがラテン語や文字の習得に熱心だった理由は何だろうか。

ピピンの子カール大帝(シャルルマーニュ)は、ランゴバルド王国を征服するとともに、北東のザクセン人を服従させ、東ではアルタイ語系のアヴァール人を、南ではイスラーム勢力を撃退し、西ヨーロッパの主要部分を統一した。カールは広大な領土を集権的に支配するため、全国を州にわけ、地方の有力豪族を各州の長官である伯に任命し、巡察使を派遣して伯を監督させた。こうしてフランク王国は、ビザンツ帝国に並ぶ強大国となった。また、カールは宮廷にアルクインらの学者を多数まねき、そこからラテン語による文芸復興がおこった。これをカロリング＝

アインハルト『カール大帝伝』(830年代)

彼(カール)の体は恰幅がよく強健で、背も高かった——それが[体形の]バランスをこわすほどではなかったが——、というのは彼の背丈が足の7倍もあったことが知られているからである。頭のてっぺんは丸みを帯び、両目はくっきりと大きく活気に満ち、鼻は普通よりやや高めで、艶やかな白髪をし、笑みを浮かべ朗らかな顔立ちをしていた。……

彼は豊富な語彙で雄弁に語り、思っていることは何でもとてもわかりやすく述べることができた。母国語だけでは十分な満足が得られず、外国語も習得するために勉学に勤しんだ。なかでも、ラテン語は普段母国語で話すのと同じくらいに精通していた。ギリシア語については、話せたというより理解することができていた。……

書字に励み、暇なときがあれば、字を書くことに手が慣れるようにと、書板と羊皮紙を寝所の枕元によくもち込んでいた。しかし、歳をとってから始めた無理なこの努力は、ほとんど実を結ぶことはなかった。(ヨーロッパ中世史研究会編『西洋中世史料集』)



カール大帝騎馬像 左手にもつ球は世界を表し、皇帝権の象徴である。

ルネサンスという。アルファベットの小文字が発明されたのもこの時期である。

ここにおいてローマ教会は、カールがビザンツ皇帝に対抗しうる政治的保護者であると認めた。800年のクリスマスの日に、教皇**レオ3世**はカールにローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。カールの戴冠は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義をもつ。ローマ文化・キリスト教・ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界が、ここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は、教皇を首長とするローマ＝カトリック教会と、ビザンツ皇帝を首長とするギリシア正教会の2つがたがいに正統性を主張して、完全に分裂した。

このようにローマ帝国以来存続した地中海世界は、西ヨーロッパ世界・東ヨーロッパ世界、そしてイスラーム世界の3つにわかれ、以後それぞれ独自の歴史を歩むことになった。

5

10

分裂する フランク王国

Q カール大帝後のフランク王国の各地域は、どのような状況だったのだろうか。

カールの帝国は一見中央集権的であったが、実態はカールと伯との個人的な結びつきのうえに成り立つものにすぎなかった。そのため彼の死後に内紛がおこり、843年の**ヴェルダン条約**と870年の**メルセン条約**によって、帝国は東・西フランクとイタリアの3つに分裂した。

東フランク(ドイツ)では、10世紀初めにカロリング家の血筋がとだえ、



ヴェルダン条約(左)とメルセン条約(右)によるフランク王国の分裂



カール大帝の「西ローマ帝国」



カロリング朝の写本文化
華麗に装飾された典礼用の詩篇集。カロリング＝ルネサンス期には、こうした古典の写本製作が盛んにおこなわれた。



⑩10～13世紀において、神聖ローマ皇帝がイタリア北部の都市やシチリアの支配に積極的に乗り出した政策。教皇との叙任権闘争(→p.117)で優位に立つためイタリアを掌握しようとしたが、失敗した。

各部族を支配する諸侯の選挙で王が選ばれるようになった。ザクセン家の王オットー1世は、ウラル語系のマジャール人やスラヴ人の侵入を退けるとともに、北イタリアを制圧して、962年に教皇からローマ皇帝の位を与えられた。これが神聖ローマ帝国の始まりである。皇帝位はドイツ王が兼ねたが、皇帝はイタリア政策のために諸侯に譲歩し、諸侯の自立傾向をまねいた。

西フランク(フランス)でも、10世紀末にカロリング家の血筋が断絶し、パリ伯のユーグ=カペーが王位についてカペー朝を開いた。しかし、王権はパリ周辺など狭い領域を支配するのみできわめて弱く、王に匹敵する大諸侯が国内に数多く分立していた。

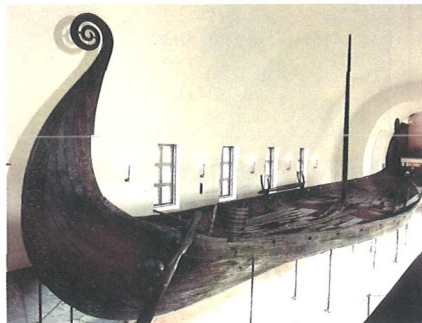
イタリアでも、まもなくカロリング家の血筋が断絶した。その後は、北方からの神聖ローマ帝国の介入や地中海方面からのイスラーム勢力の侵入などで混乱が続いた。

外部勢力の侵入とヨーロッパ世界

▶ ノルマン人が西ヨーロッパ世界において果たした歴史的役割は何だろうか。

8～10世紀、西ヨーロッパはたえず外部勢力の侵入に見舞われていた。東方からはスラヴ人がフランク王国をおびやかし、イスラーム勢力はその後もたえずシチリア島や南イタリア、南フランスに侵攻した。また、アヴァール人やマジャール人も東方から侵入を繰り返した。

スカンディナヴィア半島やユトランド半島には、ゲルマン人の一派(北ゲルマン)に属するノルマン人が住んでいた。彼らの一部は8世紀後半から、商業や海賊・略奪行為を目的として、ヨーロッパ各地に本格的に



ヴァイキング船 写真は20世紀初めにノルウェーで発掘されたもので、9世紀頃に建造されたと考えられている。

海上遠征をおこなうようになった。ヴァイキングとして恐れられた彼らは、細長くて底の浅いヴァイキング船に乗り、河川をさかのぼって内陸深くに侵入した。10世紀初め、ロロが率いる一派は、北フランスに上陸して



ノルマン人のイングランド征服 インランドの港に上陸して戦場に急ぐノルマン軍。11世紀後半につくられた幅50cm、長さ70mのバイユー刺繍画の一場面。
両端が反りあがった長い船がヴァイキング船。



バイユー刺繍画

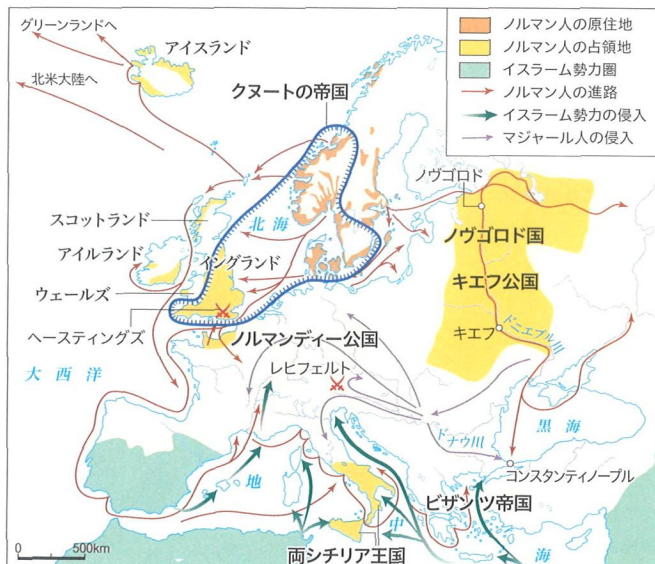
Normandie (ノルマンディー) 公国を建てた。ここからさらにわかれた一派は、12世紀前半、南イタリアとシチリア島に侵入し、^{シチリア} ^{Due Sicilie} 両シチリア王国 (ノルマン=シチリア王国) を建国した。また、大ブリテン島のイングランド(イギリス)②に成立していたアングロ=サクソン王国③もノルマン人の侵入に悩まされ、9世紀末にアルフレッド大王が一時これを撃退したものの、1016年には^{Danes} デーン人(デンマーク地方のノルマン人)の^{Cnut} ^{Canute} 王クヌート(カヌート)に征服された。その後、アングロ=サクソン系の王家が復活したが、1066年にノルマンディー公ウィリアムが王位を主張してイングランドへ攻め込み(ノルマン=コンクエスト)、^{Norman Conquest} ^{1027頃~87} ^{William I} ^{在位1066~87} ウィリアム1世として即位してノルマン朝を開いた。

②「イギリス」という国名は、グレートブリテン王国(→p.192)が成立する1707年まで、イングランドの意味で用いる。

③9世紀前半、七王国(→p.93)の1つウェセックスの王^{Edward} ^{775頃~839} エグバート(775頃~839)により統一された。

一方、リユーリクを首領とするノルマン人の一派(ルーシ)はドニエフ

ル河流域のスラヴ人地域に進出し、9世紀に^{Novgorod} ノヴゴロド国を、ついで^{Kiev} ^{9~13世紀} キエフ公国を建設し、これがロシアの起源となった。別の一派はアイスランド・グリーンランドに移住し、遠く北米大陸まで到達したものもいた。ノルマン人の原住地である北欧にもデンマーク・スウェーデン・ノルウェーの諸王国が建てられた。彼らがキリスト教化されると、ようやくノルマン人の移動も終わり、北欧は西ヨーロッパ世界に組み込まれた。



9~12世紀のヨーロッパ

封建社会の成立

Q 西ヨーロッパに特有の封建社会の仕組みとは、どのようなものだろうか。

民族大移動後の長い混乱期に、西ヨーロッパの商業と都市は衰え、社会は農業と土地に大きく頼るようになった。また、たびかさなる外部勢力の侵入から生命・財産を守るため、弱者は身近な強者に保護を求めた。ここから生まれた西ヨーロッパ中世世界に特有の仕組みが、封建の主従関係manorと荘園shōenであり、この2つの仕組みのうえに成り立つ社会を封建社会feudal societyという。

皇帝・国王shōkō・諸侯shōkō(大貴族)・騎士knight(小貴族)や聖職者などの有力者たちは、自分の安全を守るため、たがいに政治的な結びつきを求めるようになった。そこで、主君が家臣に封土しゅん かしん(領地)を与えて保護するかわりに、家臣は主君に忠誠を誓って軍事的奉仕の義務を負うという、人と人との結びつきが生まれた。これを封建的主従関係という。この関係は主君と家臣の個別の契約によって結ばれたが、やがて世襲化した。西ヨーロッパの封建的主従関係は、主君と家臣の双方に契約を守る義務がある(双務的契約)のが特徴で、主君が契約に違反すれば家臣には服従を拒否する権利があった。また、1人で複数の主君をもつこともできた。

封建的主従関係は、ローマやゲルマンの社会にみられた恩貸地制度①と従土制②に起源があり、ノルマン人など外部勢力の侵入から地域社会を守るための仕組みとして、とくにフランク王国の分裂以後、本格的に

①土地所有者が自分の土地を有力者に献上してその保護下に入った後、改めて有力者からその土地を恩貸地として貸与してもらう制度。

②貴族や自由民の子弟が、ほかの有力者に忠誠を誓ってその従者になる慣習。

荘園の構造(概念図) 中世の荘園では三圃制が広くおこなわれていた。重い犁を引く牛馬を用いて耕作したため(→p.118)、各耕地は細長い地条にわかれ、農民は各耕地に散在する地条を保有した。



騎士の叙任式 国王(主君、中央左)から剣を授けられ、忠誠を誓う騎士。14世紀の写本より。

封建的主従関係(『ガルベール＝ド＝ブリュージュの日記』より)

〔都市ヘントと結んでいた貴族イワンに失敗を批判されて、ギヨーム伯は〕飛びあがり、……こういった。「では、余は、汝が余に対しておこなっていた臣従礼^①を破棄し、汝と対等になり、すぐさま戦いを挑みたい。なぜなら、余は伯の位にあって、今まであらゆる点で正しく適切に行動してきたのだから。」……〔伯の言葉に対して、イワンたちの使者が答える〕「イワンとダニエルとヘントの人々は、あなたに次のように通告します。今まで彼らがあなたに対して犯すことなく守ってきた臣従礼を、ただちにわれわれを通じて破棄します。」

(ヨーロッパ中世史研究会編『西洋中世史料集』、一部改変)

①封建的主従関係を取り結ぶ際の儀礼。破棄する時には、主従関係を表す麦わらを相手に投げ返した。

Q▶ これは、フランドル地方の領主ギヨーム伯の書記が、当時の事件を記録した12世紀初めの日記である。ギヨームは、都市ヘントと貴族イワンとのあいだに封建的主従関係を結んだが、のちおたがいにその関係を破棄した。ここでは主君と家臣との関係について、どのようなことが読み取れるだろうか。

出現した。一般にこの仕組みにもとづく支配体制は地方分権的で、多くの騎士を家臣として従えた大諸侯は、国王に並ぶ権力をもって自立し、国王は実質的に大諸侯の一人にすぎなかった。

封建的主従関係を取り結ぶこれらの有力者たちは、それぞれが大小の領地を所有し、農民を支配する領主であった。領主の個々の所有地を**荘園**という。荘園は村落を中心に領主直営地・農民保有地および牧草地や森などの共同利用地から成り立つ。農民の多くは**農奴**^④と呼ばれる不自由身分で、移住の自由がなく、領主直営地で労働する義務(賦役)と、自分の保有地から生産物をおさめる義務(貢納)を領主に負った。彼らはまた結婚税や死亡税、パン焼きかまどや水車の使用料を領主に取り立てられた。荘園には手工業者も住み、自給自足的な**現物経済**が支配的であった。領主は国王の役人が荘園に立ち入ったり課税したりするのを拒む**不輸不入権**(*Immunität*)をもち、農民を領主裁判権によって裁くなど、荘園と農民を自由に支配することができた。

このように封建社会は、荘園を経済的基盤とし、そのうえに封建的主従関係による複雑な階層組織をもつ社会であった。封建社会は11～12世紀に成立し、西ヨーロッパ中世世界の基本的な骨組みとなった^⑤。

④農奴はローマ帝政末期のクロヌス(→p.79)や没落したゲルマンの自由農民の子孫で、長い混乱期に身分の自由を失い、領主に保護を求めるようになった人々である。

⑤封建社会の仕組みは地域や時代によって様々で、必ずしも西ヨーロッパ全体で一様に広がっていたわけではない。北欧や南フランス、イベリア半島など、自由農民が所有する土地の多い地域もあった。

まとめ

古代の社会と国家

大河の治水や灌漑のために強大な権力が必要とされたオリエントや東アジアでは、支配者の権威に多くの人々が服従する垂直型の社会が特徴で、中央集権的な領域国家が早くから育ち、そのなかから古代帝国が現れた。黄河・長江流域に生まれた秦・漢帝国も、農業生産と治水を指導する政治権力がつくり上げたもので、官僚制による整然とした国家制度が特徴である。他方、大河や大平野のないギリシアでは、独立して農業を営む市民たちが都市国家をつくった。市民たちが対等の立場でものごとを決める政治の伝統は、ギリシアからローマに引き継がれた。しかし、征服の拡大とともに都市国家としての性格を変質させたローマ帝国は、地中海世界とその周辺を政治的に統合し、のちのヨーロッパの母体となった。南アジアでは、カースト制度という独自の階級制度にもとづいた古代帝国が出現した。

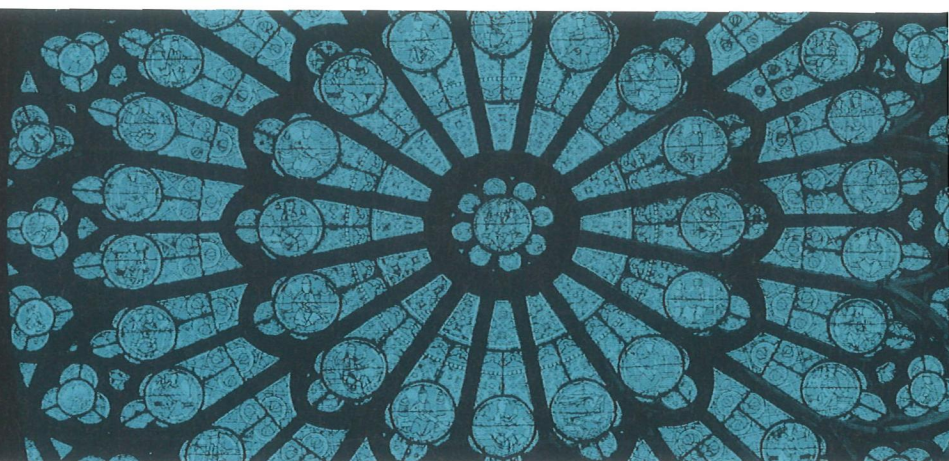
宗教と国家

宗教の発展は、古代国家の支配体制と深くつながっていた。オリエントには多神教が生まれ、最高神の権威を利用した神権政治が支配の仕組みを支えていた。ギリシアでは、同じく多神教が信仰されながらも、政治を動かす主人公は神々ではなく、あくまで市民たちであった。ローマは世界帝国になると、皇帝を神の一人として崇拝させた。パレスチナに誕生した一神教であるユダヤ教は、のちにキリスト教を生みだし、キリスト教はローマ帝国を支える国家宗教に発展した。南アジアでは、バラモン教の世界観がのちのカースト制度の原型を形づくり、社会秩序の根本となった。ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教もここから生まれた。仏教は南アジアでは衰退し、むしろ東アジアや東南アジアにおいて国家権力と結びついて興隆した。しかし、東アジアの政治的秩序を支えたもっとも重要な思想的背景は、古代中国に生まれた儒教である。その礼と徳の思想は、皇帝支配の論理として長く影響力を保ち、華夷思想にもとづく国際秩序にも根拠を与えた。

まとめの問い

- ① 古代国家の支配の仕組みは、それぞれの地域の経済や社会とどのような関わりがあったのだろうか。いくつか取り上げて、その特徴を考えてみよう。
- ② 古代国家は、宗教や思想をどのように統治に利用したのだろうか。いくつか取り上げて、その特徴やのちの時代への影響について考えてみよう。

第Ⅱ部



諸地域の交流・再編

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で学んだ諸地域の展開とその再編について学ぶ。西アジアに誕生したイスラーム教は、広範な地域に伝播^{でんぱ}して現地社会に大きな影響を与えた。また、モンゴル帝国の時代から本格化する陸と海の交流は、「世界の一体化」の先がけとなった。さらに、こうした交流の活発化^{こうえき}にもとづく地球規模での交易の拡大は、アジア諸地域に繁栄をもたらす一方、ヨーロッパ諸国の海外進出やその内部の変革ももたらした。これによって16世紀以降、「世界の一体化」が始まり、アジア諸地域とヨーロッパの再編がうながされることになる。



こそはんかす じふよう
「姑蘇繁華図」(徐揚作、18世紀)

諸地域はどのように交流し、 また再編を進めたのだろうか？

第I部で学んだ諸地域は、交流を活発化させ、相互に影響を与えつつ再編を進めていく。こうした動きは、交易の拡大や都市の発達、文化・技術の伝播など、第I部と同様に様々な視点から考えることができる。ここではその一例として、ある現代の社会学者がとなえた、13世紀における各地の経済ネットワークを8つに分類した地図を手がかりに、資料とあわせてヒトやモノの移動について考えてみよう。

13世紀における各地の経済ネットワーク(アブー・ルゴド著、佐藤次高他訳『ヨーロッパ覇権以前』をもとに作成)



カンバルク(大都)の町からは多くの道路や道が出て、さまざまな地方に通じている。ある道はある地方に、別の道は別の地方に通じ、……さて、どのような道をとろうと、カンバルクを発って25マイル進むとイヤン^①と呼ばれる宿駅に着く。これは「馬の駅」という意味である。この駅には大きく美しく豪華な館があり、大カーンの使者はそこに宿泊する。部屋にはこれも美しく豪華な寝台が多数備え付けられ、絹の立派なシーツのほか、必要な調度がすべて揃えられている。

(歴史学研究会編『世界史史料4』)

①モンゴル語で「道」を意味する「ジャム」の訛った発音。

A マルコ＝ポーロ『世界の記述』にみえるある制度の記録

Aで述べられている制度はどのようなもので、また8つのネットワークのどの地域にあたるだろうか。さらに、Bの道具はその制度でどのように使われたのだろうか。



B 牌子

このサルコン(ザイトン、泉州^{せんしゅう}の呼称)の港には、インドからやって来る船がかならず立ち寄り、香料類や各種の貴重な商品をもたらすので、マンジ(蜜子)地方^①のあらゆる商人も買い付けにやって来る。莫大な量の商品や宝石類、それに真珠などが集められた有様は壮観で、それらが今度はこの港からマンジ地方に送り出される。キリスト教国のために胡椒^{こしょう}を積んだ船がアレクサンドリアの港にようやく1艘^{そう}やって来るとしたら、このサルコンの港には10艘以上の船がやって来るといっても過言でない。したがって、大カーンがこの港から得る税収も莫大である。宝石類、真珠など貴重な商品については1割、胡椒については4割4分、沈香、白檀^{ちんこう}など大きな商品については5割の税がかけられている。(歴史学研究会編『世界史史料4』)

①元代における中国南部の蔑称。

C 『世界の記述』にみえるある都市の交易の様子

Cからは、当時扱われていた商品やその経路について、どのようなことが読み取れるだろうか。また、これはどのネットワークに関係するものだろうか。

Eはどのネットワークに関係するものだろうか。また、どのような交易がおこなわれ、さらにこの海域で用いられた船にはどのような特徴があるだろうか。

まず、われわれは、シャマルの風^①の始まる時期に、アラビアの岸辺、つまりイエメン、ジッダ、そしてパーブ＝アルマンドゥブ(パーバルマンドゥブ海峡)のような近隣の場所、ザヤーリッ(ザイラウ)^②の岸辺とティハーマ地方^③とそれに関わる場所から船出することで話を始めよう。つまり、これらのすべての場所は、[モンスーン(季節風)航海のうえでは]相互に関連しており、そのすべては基本的には大海(インド洋)のモンスーン[航海期]と同一のものである。人々は、[これらの場所から]ダブールの風^④の初めとその終りに[アラビア海岸を離れてインドに向けて]船出する。(歴史学研究会編『世界史史料2』)

- ①「北風」の意味。②紅海とアデン湾を分ける海峡の北東アフリカ側の都市。
③紅海に面したイエメンの海岸低地地方。④夏季の南西モンスーン。

Dはどのネットワークに関係するものだろうか。また、ジャワ島をはじめとする東南アジアの諸島部には、どのような地域の人々が、何を目的に往来していたのだろうか。



D 港市国家バンテンの有力者たち バンテン(ジャワ島)の有力者たちを描いたもの。左からインド系ムスリム商人、ジャワ貴族、華人商人。17世紀。



E 「インド洋における航海の指南書^{しなんしょ}」と、この航海で用いられたダウ船

- Q1 A～Eを総合すると、当時の交易についてどのようなことがいえるだろうか。また、当時の人々はなぜこうした交易をおこなっていたのだろうか。
Q2 資料に対する疑問や興味、または関心のある視点にもとづいて、自分自身で第Ⅱ部への問いを立ててみよう。